
対戦隊戦隊 アンチレンジャー

IOTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対戦隊戦隊 アンチレンジャー

【Zコード】

Z2283D

【作者名】

IOTA

【あらすじ】

気が付くと見知らぬ部屋にいた・・・、そんな在り来たりな展開で始まる俺の奇想天外、阿鼻叫喚、空前絶後な戦闘劇！

プロローグ

「アリス、何ですか？」

それが俺の第一声だつた。

しかし、その声は虚しく響くだけだ

やたらと広い部屋、壁、床、天井、全てが白い一色で、窓やドアが一切ない、球状の部屋、正確な面積はわからないがおそらく十畳程だろう。その中心に俺は立っている。

この部屋には俺の他に三人もいるのに誰も俺の声に反応しない、見向きもしない。

俺の一番近くに居る少女は中学生ぐらいだろうか、ちょこんと座り込んでいる。白いブラウスに青いスカート、滑らかそうな黒髪が肩まで伸び、精悍な顔立ちは良いトコのお嬢様といった印象だ。

次に近いのは小学生だった、黒いランドセルから男の子だとわかる。もしランドセルが赤かつたら女の子と間違えそうな顔付きだ。周りを不思議そうに見渡しながら歩き回っている。

一番遠くに居るのは女だった、青いジーンズに白いシャツ、髪はショートの茶髪だが顔が見えない、体育座りで顔を膝に埋めているのだ。その女性は窺う様にゆっくり顔を起こすが、俺の視線に気付くと素早く顔を引っ込めた。照れ屋なのだろうか？

キヨロキヨロしていると一番近いブラウスの少女と田が合つた。

「あのお・・・、こじどこかな?」

すかさずその少女に訊いてみる。

しばらく少女は冷たい眼差しを俺に向かへ

「すいません。知らない人と話してはいけないとじいから教えられておりますので」

と優雅に頭を下げる。ぽを向いてしまった。

Gというのは誰だろう? 何かのコードネームだろうか? いや、おそらく『執事のじいや』という意味だ、どうやら本物のお嬢様らしい。

こんなシユールな状況はそのじいとやらも予想していないと思うのだが・・・。

もしかしてシユールなのは俺だけ? この人達は自分の置かれている状況が分かっているのだろうか?

「やれやれね」

「うおっ! ?」

真後ろからの声に俺は飛び上がる。

距離を取りながら振り向くと女が立っていた、黒いタイトスカートのスース姿、長い黒髪を後ろで束ねて、赤い眼鏡を掛けている。大企業社長の美人秘書、そんなイメージの女。

「あつ! あんた! 」

そうだこの女だ、こいつが俺をこんなシユールな状況に巻き込んだ張本人だ。

プロローグ（後書き）

荒すゝざるありすじしか決まっていませんが、不定期的に連載していく予定です。
楽しめる作品を出すしますのでよろしくお願いします。

一・意志薄弱

田を覚ますと夕方だった。

「…………やべつ」

涎を拭いベッドから起き上がる。どうやら寝過ぎたようだ。

携帯電話を開いて時刻を確認する、四時一十分。

「ぎりぎり夕方ではないな」

今日が休日なら問題無い、しかし今日は平日、普通に授業もある。

「たまにはいいだろ」

寝坊もたまになら問題無い、しかし週に一日はこんな調子だ。

「今日の授業は比較的、付いて行ける方だから大丈夫」

俺が優等生なら問題無い、しかし俺は超が付く程の劣等生、授業をサボれる身分じゃない、教員から死の宣告を受ける日もそう遠くはないだろう。

「…………びつくりするぐらいダメだなあ、俺は

自分との葛藤を早めに切り上げ、服を着替える。

「まあ、明日からちゃんと行こう」

決まり文句となつた言葉を呴いて、部屋を出た。

最寄のコンビニまで歩いて五分、この便利さが俺みたいなダメ学生を増やす原因なんじゃないだろうか。

文明が進んだ今の世の中、肉体にとつては便利だが精神にとつては不便なんじゃないか。

人間は歩きたくないから車を造つた、考えたくないからコンピューターを造つた、近くで殺したくないから銃を造つた。

それらが造られた本当の理由なんて俺は知らない、でも使つてゐる奴は便利だからという理由で使つてゐるんだ。

文明が栄える程人間の精神は衰えていく、それは歴史が証明して

いる。

そう考えると一つの疑問が浮かぶ、人間は本当に進化しているのだろうか？ 退化しているんじゃないだろうか？

「そんな事を考える前に学校行けよ」「ボソソッと自分に突っ込んでコンビニを出た。

昼食兼夕食の入ったビニール袋を下げて、アパートに到着。

パソコンを起動し、購入したてのカツプ麺にお湯を入れる。

日清のシーフードヌードルだ、こいつに出逢つて早十年、俺は完全に骨抜きにされている。こいつを造った奴は天才だ、神と呼んで崇めてもいいだろう。

こいつのファンは多い、しかしその魑魅魍魎の中で俺は群を抜いている。

シーフードヌードルになら殺されてもいい、むしろ殺されたい。その麺で俺を縛ってくれ、その汁に俺を沈めてくれ、そのタコ、蟹、卵で俺を陵辱してくれ。

「四分絞ったな」

蓋を剥がすと芳醇な磯の香りと鮮やかな具材達が俺の世界を支配した。

ちなみに四分は俺のこだわりだ。

「いただきま～す」

伸びかけ極上麺を最上級スープに絡め、持ち上げた。その時、

ガラツ

俺の部屋の窓が力強く開放された。

「・・・・・」

黒いスーツに眼鏡の女、その女がベランダから俺の部屋の窓を開けていた。

俺が呆けたように見つめていると、女は土足のまま窓を跨いで侵入してきた。

露骨過ぎる不法侵入。

「ちよつ！　おい！　何あんた！？」

女は質問に答えず我が物顔で玄関に方に歩いて行きドアに耳を当てる、女はじつと動かない。俺は何か言おうと立ち上がるが、女に無言で睨まれた、その女の目には有無を言わざぬ雰囲気があった。俺は思わず後退る。

突然、女は舌打ちをしてドアから離れた。

次の瞬間、轟音と共にドアが開いた、否、ぶち破られたと言つた方が正確だろう、上の蝶番が壊れてドアがおかしな形に傾がつている。

そのドアを踏み倒し灰色の作業服を着た男達が俺の部屋に乱入してくる。後ろの窓からも同じ服装の男達が入り込んで来ていた。俺の部屋はあつという間に数十人の不法侵入者に占拠された。このくそ狭い部屋には多過ぎる人数だ、俺は意味も分からず部屋に中央に追い詰めた。

「つと」

誰かとびつかる、スーツの女だ。俺はスーツの女に背を預けていた、女も俺に背を預けドアの方の男達と対峙している。

俺はシーフードヌードルを持ったまま、こんな状況でもこいつだけは離さない辺りは流石、俺。

若干落ち着きを取り戻してきた、冷静に考えよう。

事情は知らないがこの女は追われていたのだ、そして俺の部屋に逃げ込んだ。

「・・・・・」

ちょっと待て。だとしたらこの構図は不味くないか？　まるで俺がこの女の仲間みたいじゃないか。誤解を解かねば。

口を開こうとした時、後ろから女が俺に囁きかけてきた。

「・・・あれ使えるの？・・・」

女はベッドの方を横目で見て、ベッドの上には黒い拳銃が置いてあった。グロツク17、俺が寝坊した原因だ。昨日徹夜で整備

した、勿論使える、性能も俺のお墨付き。

「・・・使えるけど」

俺の台詞を最後まで待たず女はベッドに跳んだ、ベッドの上で転がり姿勢を起こす、手にはグロツクが構えられていた。

その動きは流れる様な速さ、素人目に見てもわかる、この女は素人じゃない。

俺は思わず見惚れていた。

銃口を向けられ怯む男達。

しばらく沈黙が続き、男の一人が意を決した様に女に飛び掛った、すばやく照準する女。

バツツ

女の持つ俺のグロツクが火を噴いた・・・、いや、火は噴いてない。

「いて」

男が間の抜けた声を上げる、男の腹部からBB弾が転がり落ちた。

俺のグロツクは少量のガスと6ミリのBB弾を噴いたのだ。

「・・・・・」

静まる空気、シーフードヌードルの匂い、距離を詰める作業服の男達、恨めしそうに俺を睨む女。

・・・いや、睨まれても・・・、ちゃんと使えたじやん。

「あうつ」

首筋に一瞬の激痛を感じ、意識が遠退く。ぼやける視界の中で女は男達に囲まれながらもまだこちらを睨んでいた。

・・・いや、だから睨まれても・・・・・・。

気付くと俺は白い部屋にいた。

起き上がりながら周りを見渡す、人がいる、三人。それぞれがバラバラと広い部屋に散らばっている。そんな状況だ。

目が覚めたら見知らぬ場所にいた人間の台詞は決まっている。
すなわち俺の吐くべき台詞は・・・

「レジビーですか？」

一・意志薄弱（後書き）

シーフードヌードル、おいしいですよね。
それはもうこんな始まりで始まってしまった、青年のお話です。

一・懲懲無礼

「痛い痛い痛い痛い！死ぬって！マジ死ぬって！」
ギリギリと首が締め付けられる、頭が千切れそうな痛みと喉が詰
る苦しみが死の危険信号を知らせている。

「五月蠅い！死ね！マジ死ね！」

俺はスーシ女にヘッドロックされていた。

「ちよつ・・・な、なんで！？グロック使えたじやん！」

言いながら女の手を解こうとするがビクともしない。

「あの状況でエアガンが使えるかあボケッ！」

スーシ女は美人に似合わない暴言を吐く。

あの状況つて、人生五里霧中の俺が他人の状況なんて知るわけない。

「ううぐ・・・す、いません・・・でした」

薄れゆく意識で精一杯誠意を込めて謝る。

美人からヘッドロックされるなんて青少年にとつては「」豪華な
だろうが、如何せんこの女には手加減がない。後頭部のふくよかな
弾力を楽しむ余裕なんか皆無だ。

他の三人は俺達の様子を見守っていた。誰か助けるよ。

このままでは人生初の死亡を体験してしまう。いや、死亡に初も
くもないか？・・・あ、マジヤバイ・・・視界が、暗く、な
つて・・・。

『その辺にしておいてあげてください』

その声と同時に俺は解放された。

「ごほっ、げほげほ、がはあ」

貪るように酸素を吸い込む。助かった天の声だ。

『気持ちちはわかりますが、とりあえずみな落ち着いてください』

アニメの声優の様な甲高い声が何処からともなく聞こえてくる、
俺は感謝の言葉を述べようと辺りを見渡すがその声の主らしい人物

はいない。

スーツ女含め他の四人も周囲を見渡している、見渡すというより警戒している。

『探ししても無駄ですよ。これ放送ですかから』
その証拠に、とマイクをトントン叩く音がする。マイク越しにじては妙に声がクリアだ。

『皆さん、『多忙の所集まつて頂き大変恐縮です』

別に俺は『多忙じやないし集まつたんじやない、拉致られたんだ。スーツ女が逃げていたことを考えるとここにいる全員強制的に連行されたと見て間違いない。

『さて、ここからが本題ですが、みなさんはこれから・・・』
たつぱり間を開けるアニメ声。

殺し合いをしてもらひます、とか言つんじやないだらうな。
『殺し合いをしてもらひます』

・・・マジで？

『嘘です』

なんだこいつ。

ずつこけるべきなのが迷つていてとスーツ女が天井に向けて口を開いた。

『ざけんじやないわよつー。ここがどこでなんで拉致つたのか、きつちり説明してもらおうじやないかつー。』

凄まじい剣幕に俺はビビる、まさに極道の女。スーツ姿にその様はあまりに不釣合い。

俺の心の中で姉御と呼ばせてもらひます。

『まあまあ、一度言つてみたかつたんですよ。ふふふ』

その声は笑つていて。その幼い笑い声に毒気を抜かれた様子の姉御。

『とにかく、皆さん。『自身の職業から考えて、今の状況に多少なりとも心当たりがありますよね？』

職業？ 少し考えてみる。授業サボりがちな大学生、半ニート。

まさかつ二ートの撲滅を狙うA・H・Kが全国から選りすぐりの

アンチ二ートクラブ

二ートを集めて肅清しようとなつ！

・・・ねーよ。声を大にして言おう。

「ねーよ！」

天井に向かつて叫ぶ、が。

『そうでしよう、心当たりと言つより常に警戒していた気掛かりとでも言いましょうか、そのような事態が起こつてしまつたと言つていいでしよう。しかし安心してください我々の目的は・・・つてないのかい！』

ノリ突つ込みされた。

本来ならそのアニメ声の主に向かつべき一同の冷やかな視線が行き場を失い俺に突き刺さる、かなり恥ずかしい。

ブラウスの少女が冷笑するのを俺は見逃さない。文句があるなら天井に言え。

『ふふつ、ノリ突つ込みも一度してみたかつたんです。期待通りのベタな反応ありがとうございます』

出て来いこの野郎、そして一発殴らせろ。俺の信条は老若レフ女容赦なしだ。ジジイだろうがガキだろうが女だろうが手加減しねえぞ。男は反撃が怖いからバス。

『まあ、あなたは成り行き上仕方なく、完璧に巻き込まれた形ですから、わからなくてもしかたないでしようね』

「・・・だつたら出せ！」

確認したわけじゃないが、俺達はこの部屋に閉じ込められているという確信があった。

ここにいる人間はみんなこのドーム状の部屋に監禁されている。状況を見れば俺にもそれぐらいわかる。

『ダメです』

即答された。やっぱりと言つべきだつ、素直に出してくれるなら始めから連れて来ない。当たり前の話だ。

『言つたでしよう、巻き込まれたんです。過去形です。あなたはも

う巻き込まれてしまつたんです。その過去はもう変えられません、ドクがデロリアンでも造つてくれない限りね。ふふふふ

デロリアンときたか、普通はドラえもんとかだろ。・・・待てよ、今のガキはバック・トゥ・ザ・フューチャーなんて知らないだろ。この声の主は子供じやない?

ブラウスの少女とランドセルの小学生は怪訝そうに小首を傾げて、いる、やはり知らないんだ。

「俺がそんな些末な違和感を抱いていると、そんな事よりつ! とつとと説明しな、あたしは気が短いんだよ

つ

姉御が痺れを切らした様に言つ。

『 そうですね。では单刀直入に、皆さんにはあるチームを組んでもらいます』

「ああん? チーム?」天井に凄む姉御。その様は少し滑稽だ。

『 そうです、チームです、チームである人達と戦つてもらいます。説明は面倒なので・・・戦闘開始つ!』

「待てい!」

すかさず突つ込む俺。

「チームって何!? 戦つってなんだ!?

『 ふふつ、嘘ですよ、きちんと説明します。あなたとはじいコンビになれそうです、連れてきて正解です』

俺はお前の相方になるために拉致られたのか?

『 とりあえず、皆さんお互いに自己紹介してください。名前、年齢、趣味、好きな食べ物、好きな異性のタイプ、入りたい部活、一分以上でお願いします』

入りたい部活ってなんだ!? 新入生の担任みたいな事言いやがつて、と突つ込みたかつたが同じ轍は三度も踏まない。

ちなみに俺は高校のときは帰宅部ですって言い切つたのを覚えてる。

「何回言わせんだい？ やけんじやないよつ！ そんなつ」

『おつ、威勢がいいなあ。先生嬉しいぞお、じゃあ、君からつ。』

アニメ声は姉御の言葉を遮り、教師の真似だろうか？ 声色を低

くして言つ。

姉御は鬼の形相でプルプル震えている。近くに居たら危険だ、俺はさりげなく距離を取る。

「それをやらないと説明してくれないんですか？」

ブラウスの少女が声を上げる。

『おつ、君は飲み込みがいいなあ。その通りだ、ここは僕の教室だ。主導権は僕にある』

どんな教師だよ。

「じゃあ、私から始めてもいいですか？」

俺も含め一同がその少女に注目する、確かに今はこの声に従うべきだ。

『おつ、君は積極的だなあ、先生内申上げちゃうつ！ じゃあ、君から始めてくれ。みんなに聞こえるように大きな声で言つんだぞつ』
どうでもいいがアニメ声は教師の真似になつてから常におつで言葉を始めていい、安直過ぎるイメージだ。

「名前は詩織しおりです。年齢は十四歳、趣味は読書、好きな食べ物は梅干、好きなタイプは特にありません。入りたい部活は帰宅部です。よろしくお願ひします」

淡々と自己紹介を済ませる詩織と名乗つた少女、何をよろしくお願ひするのか気になつたがそれよりも俺は帰宅部を取られたことが悔しかつた。

『詩織ちゃんは上品ですね。チームで言つたらクールキャラつてとこですかね・・・、一十三秒しか話してませんが、まあいいでしょ』

う

声はアニメのそれに戻つていた。飽きたのだつ。

『じゃあ次の人どうぞ、誰でもいいですよ』

じうじうのは先に済ませた方が楽だ、俺が手を上げようとするとい

以外な人物が名乗りを上げた。

「じゃあ、あたし」

姉御だ。諦めたのか切り替えたのか、その表情からは判断できない。

『じゃあ、あなた』

「名前は吉崎藍子、年齢は二十六歳、趣味なし、好きな食べ物はス「姉御、改め吉崎藍子は早口言葉の様に年齢を誤魔化し好きな食べ物を発表しようとした、その時、

『あ、言つておきますけど、好きな食べ物は寿司、ラーメン、焼肉意外でお願いします。多いんですよ、それ言つ人』

アニメ声に遮られた。

確かにそれを言つ奴は多い、俺も高校のとき回りに流され寿司つて言つた気がする。

どうやら吉崎さんもその口の様だ、スと言いかけた口をぱくぱくさせた、

「ス、ス、ス・・・ステーキよつ！」

しりとりで言葉を思いついた様に言い放つ。なぜか満足げだ。

それじゃ焼肉と大差ありませんぜ、姉御・・・。

『吉崎藍子二十六歳、このチームでは最年長ですね。長老』

「誰が長老だつ！ つーかばらすなあ！ 出て来いこの野郎！ ぶつ殺す！」

キレる、吉崎さん。二十六歳には見えない、良い意味で。

そんな吉崎さんを気にする様子も無く、『ん？』と不思議そうなアニメ声。

『あなた、中央に来てください、そんな角にいたら聞こえないでしょ？』

見ると確かに一人だけこの部屋の隅から動いていない、茶髪の女だ。最初に見た体勢のまま固まっている。

そんなことがわかると「う」とはこの部屋にはカメラもあるようだ。

『お~い、聞こえますよね？ チームには協調性が大切なんですよ』

チームつてのはわからないが、確かに協調性が無いのは感心できない。こんな状況ならなおさらだ。

「あの~、気持ちはわかりますが、ここの声に従つときましょうよ」

俺が声を掛けると、茶髪女はジクッと肩を揺らした。しかし、それだけで動く気配が無い。具合が悪いのか？

俺が近付こうとしたら、その女はいきなり後ろ向きで立ち上がり、ことあるごとに白いシャツを脱ぎ出した。

「えええええ！？」

「はああああ！？」

『What's up!？』

俺と吉崎さんとアニメ声の驚きがかぶる。

外人が混じってたな・・・、そんなことよりつ、俺何かまずい事言つたか！？

茶髪女の肢体があらわになる、在り来たりな表現だが透き通る様な白い肌だ。後ろ姿だがそれでもそのプロポーションの良さはわかる。白い肌には似合わない灰色のスポーツブラが余計に色っぽい。俺は思わず見惚れた、否、故意に凝視した。

「・・・変態」

ボソツと詩織とやらの明らかに俺に向けた毒舌が聞こえて来た、この場合どう考へても変態はあの女だろ。向こうに言へ。

茶髪女はシャツを脱ぎ終わると今度は下のジーンズを脱・・・がなかつた。

脱いだシャツを顔に巻きつけ後ろで結んでいる、何がしたいんだ？ つていうか下は脱がねえのかよ、少し残念。

茶髪女が意を決した様に振り返る、その顔は見事に白いシャツに隠され、目から上だけがこちらを覗いていた。勿論、上半身は下着だけである。

そして突然、

「名前は山田響子ですっ！ 年齢は二十歳です！ 趣味は空手ですっ！ 好きな食べ物は鯛焼きです！ 好きなタイプはニコータイプです！ 入りたい部活はテニス部でしたっ！ よろしくお願ひしますっ！」

と茶髪女改め山田響子が叫ぶ様に一息に言い切った。

「ニコータイプって……。

宇宙空間ばかりに静まり返る室内、時が止まった様に呆ける一同、肩を揺らす山田さん。

『え～と、まあ、なんですか。山田さんは、うん、極度のシャイキャラリってことで……』

さすがに焦ったようなアニメ声、無理も無い。

山田さんはフーフー肩で呼吸しながら近づいてきて俺達の輪から少し離れた所に座り込んだ、その目には涙が少し浮かんでいる。

『気を取り直して、次の入どうぞお～！』

アニメ声はこの異様な雰囲気を払拭しようとも明るい口調で言いつ。どうやら気は遣える方のようだ。

「はい」

俺は手を挙げた。空気は最悪だが、トリを務めるよりました。しかし、

『・・・・・』

アニメ声が反応しない。

「おい」

『・・・・・』

一同の視線が再び俺に集まる、恥ずかしい。

この声の主は俺に恨みでもあるのだろうか？ それともこれは学校をサボった罪に対する罰なのだろうか？

俺が挙げた手を降ろすタイミングを見計らっていると、

『・・・・・君、ランドセルの君。・・・・君が次でしょ、空気読んでよ・・』

・・』

と耳打ちする様なアニメ声が聞こえた。勿論、マイク越しである以上、個人に呼びかけるなんて芸当はできない。

俺は構うものかと、

俺の名前は「

自己紹介を始めるが、

アーメ声に遮られた。

「業の当時は大河内昂でえすつ。年齢は十一歳でえすつ。
少年は弔し訟なやそに俺を一轍してから語り始めた。
おおひしづかば

兄ちゃんと遊ぶことえすつ。好きな食べ物は、えーと、『めんな
さいカレーライスしか思いつきません。好きなタイプは優しくして
くれるお兄ちゃんえすつ。入りたい部活は柔道部えすつ
』

萌えええ

女性陣（まあ、俺以外）の顔が緩む。

確かにえすつと伸ばすような言い方が小学生らしく微笑ましい
が、・・・この大河内とかいう小学生、男だよな？ 好きなタイプ
と柔道部の件が猛烈に引っかかったのは俺の気にし過ぎだらうか・・・

そんなことより次はいよいよ俺の番だ。正直こんな濃い自己紹介の数々と聞かされては非常に話したくないのだが、仕方ない。

「ホンシとわざとうじく咳払いをして、一同の注目を集め、口を

開いた。そのとき

『あなたの自己紹介が済んだところで説明に入ります』

• • • • •

俺は生まれて初めて本気で人を殺したいと思ったとさ・・・。

一・懶懶無礼（後書き）

まず、プロローグと一緒に比べて長くなってしまった事をお詫びします。

無計画の象徴ですね、申し訳ないです。

読んでくれている方に感謝！

三・荒唐無稽

これまでの展開がスムーズといつか速過ぎるといつか、とにかくそのおかげで幸か不幸か俺の常軌は麻痺していた。

周りの人間が妙に冷静だから、ということもあるだらう。

詩織は冷静沈着。

吉崎さんは怒鳴つてはいるが取り乱しているわけでは無い。大河内は何処吹く風だ。

皮肉にも山田さんの反応が一番まともと言えるだらう。その格好はまともじやないが・・・。

冷静3、混乱1。

そんなわけで、流されやすい性格の俺は多数決により冷静でいることを決めたのだった。

『みんなさんの自己紹介が済んだところで説明に入ります』

俺の自己紹介を飛ばして語り出すアニメ声。

それも冷静に考えれば吉と見るべきだらう、したくもない自己紹介をしないで済むのだ。

『みなさんにはある者達を殺してもらいます』

・・・・・え？

『標的はチームです』

・・・・・は？

『皆さんもそれ故のチームです』

・・・・・ What?

早くも冷静でいられなかつた。

殺す？ 殺すって言つたのか？ 命を奪うつて意味の殺すか？
顔から血の気が引いていく。

これ以上無い犯罪行為じやないか・・・。

チームで戦うとか言われた時点で、否、拉致られて監禁される時点でもつと怯えて、心の準備をしておくべきだつた。

そこで突然、

「なんだ依頼ですか・・・。だつたら事務所通してください」
詩織が不満そうな声を上げる。

何、言つてるんだ？ 事務所？ 依頼？

「あたしは殺しを生業にしてるわけじやないんだけどねえ」
吉崎さんが半笑いでそんな事を言つてゐる。

殺し？ 生業？

「直接手に掛けるんだつたら嫌ですよ
大河内が困つた様な顔をしてゐる。

直接？ だつたら？

「・・・・・殺生、か」

唯一の常識人だつた山田さんまで真顔でそんな事を呟いてゐる。

どうなつてゐる？ なんでそんなに冷静なんだ？ それに依頼とか
生業とか直接とか殺生とか・・・、何を言つてるんだ！？

『まあまあ、皆さん。各自思ひにいがあるでしょ？ が、今は話を
聞いてください』

一同が静まる、顔は恐い程に無表情だ。

ただ一人、俺だけがこの状況に合つた常識的な表情をしている。冷静でいるためにとりあえず”殺し”といつ単語は忘れることにした。

『特撮の戦隊モノつて知つてますよね？ 戦隊とか、何とかレンジャーとか、あれは実在しています』

「馬鹿にしてるんだつたら今すぐ帰せ」

吉崎さんがドスの利いた声で応じる。

『いいえ、これは冗談や虚言ではありません。真面目な話です』

甲高いアニメ声だが確かに真面目な口調だ。

『戦隊ヒーローと悪の組織は存在します。勿論、正義のヒーローは悪の組織と戦います。当たり前の話ですよね？』

誰も何も言わない、否、何も言えない。

『その戦いが始まってから三年間、両者の戦力は拮抗していました、しかし！ ここに来てバランスが崩れました。一つだつたはずの戦隊が増殖したのです』

「はつ、付いて行けないわ」

吉崎さんが両手を広げてシニカルな笑みを見せる。

しかし、アニメ声は構わず続ける。

『確認しているだけでも六つの戦隊ヒーローを名乗る組織が誕生してしまつたのです、最初の一つと合わせて七つ。戦力は一気に傾きました。悪は一つなのに正義は七つ以上、当然の話ですよね？』

『その話が私達とどう繋がるのですか？』

詩織がもつともな疑問を投げかける。

『悪の組織は虫の息です、もしこのまま正義が勝つて悪が滅んでしまつたら大変です』

「だから、どう繋がるのですか？」

ここで初めて詩織が露骨な感情を見せた。苛立ちだ。

『正義のヒーローが普通に人間なら問題ありません、しかしそのヒーロー達は強力で不思議な力を持っています。考へても見てください、もし悪の組織が滅んでしまつたらその強力な力の矛先がどこに

向ぐのかわかりません』

「・・・その戦いの均衡を保つために戦隊ヒーローとやらを殺して欲しいんですか？」

『その通りです！　さすがクールキャラですね』

詩織は自分で訊いておいて「バカバカしい」と吐き捨てた。

唯一、眞面目に話を聞いていた大河内が口を開く。

「でも、悪の組織が滅んでもヒーロー達が悪いことするつて限らぬいじやないですかあ」

『良いところに気が付きましたね、昂くん。それは彼ら、ヒーロー達の戦いぶりを見てもらえばわかると思います。それに』

と、ここで意味深な間をおくアニメ声。

『今までは便宜上、正義と悪と呼んでいましたが、それは正確ではありません。悪は悪事を働いているわけじゃないですし、正義はそれを止めようとしているわけじゃありません、正義も悪も無い、ただ仲が悪いから戦っている、どちらも同じ人間です。そして』

と、またも間を溜める。

『たとえ悪が悪事を働いているとしても、正義がそれを止めようとしてるとしても、あなた方は問題ないんじゃないですか？』

「・・・・・・・」

一同が黙る。

問題ない？　お前の頭が問題あるわ。

『この中には正義のヒーローを殺すことに自責の念を感じる人なんかいないでしょ？　世の中の人間を正義と悪で一分したら、あなた方は間違いなく後者ですよ』

アニメ声の言わんとするところが理解できない。

あなた方に俺も入っているのだろうか？

俺は自分が正義だとは思わないが、悪でもない。それに善人だろうが悪人だろうが人間を殺したら自責の念だって感じまるに決まつてる。そう断言できる。

俺の思いを読み取ったのかアニメ声は『ああ』と思い出した様に

言つ。

『そりいえば一人いましたね。巻き込まれてしまつた人が、じゃあ、詩織ちゃん、吉崎さん、山田さん、昂くん、彼に自分の職業や特技を教えてあげてください』

俺はゆつくり一人一人の顔を覗き込む。山田さんだけは視線を逸らしたが、彼女以外は全員無表情で俺を見つめていた。

そして

「私の職業は殺し屋です」

と詩織が優雅にお辞儀をした。

「ああ、どうも」一寧に

俺も思わずお辞儀をしたが。

「…………え？」

「ロシ屋？ それなに屋さん？ ロシなんて商品俺の記憶には無いぞ。

俺の頭がその言葉に追いつく前に、

「あたしは職業なんて立派なもんじゃないが吉崎組の跡取り娘だよ。わかりやすく言うならヤクザもんさね」

と吉崎さんが腰に手を当てシニカルに言つ。

いや、わかりやす過ぎてわかりたくないんですけど……。

どうやらリアル姉御のようだ。

クラクラしながら大河内を見る。

「僕の職業は小学生でえすつ。特技は黒魔術でえすつ。よろしくねつ、お兄ちゃんつ」

どこか卑しい目付きで俺を見ながら改めてよろしくされてしまつた。

特技の黒魔術よりもその目付きに俺は寒気を覚える。

俺の口からは魂が出掛けついていた。

そんな俺の後ろから「あの～」と申し訳なさそうな山田さんの声。

「…………私…………職業はフリーターで……、一応、忍者やつてます、……すいません」

「ンジャつて、あの忍者だろつか？ 刃に心のあの忍者？
やいば こころ

殺し屋にヤクザに黒魔術師にくノ一だ。わ〜い。本物かな〜？
偽者だつたらいいな〜。でもどうせ本物なんだろな〜。ち
くしょ〜。

俺は、考えるのを、・・・やめた。

三・荒唐無稽（後書き）

急にシリーズになつたり、主人公のキャラがコロコロ変わつたり、荒唐無稽なのはこの作品ですね。まったく面白いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2283d/>

対戦隊戦隊 アンチレンジャー

2010年10月11日17時27分発行